

近畿地方出土の埋設土器について

京都大学埋蔵文化財研究センター 千葉 豊

1. はじめに

さきに報告したように（本報告書、IX章参照）、中戸遺跡からは縄文人がなんらかの意図をもって土中に埋設した土器が3基発見された。一般に、「甕棺」あるいは「埋甕」と呼ばれる、このような出土状態を示す土器は東日本では数多くの事例が報告され、中部高地や関東では中期後半に盛行する屋内埋甕の検討を中心として多くの研究がなされている^①。一方、西日本では晩期の人骨出土甕棺などの一部の集成的検討^②を除くと、事例数が少なかったこともあって、具体的な検討はほとんどなされてこなかったといえるであろう。

ところで、近年、近畿地方においては縄文遺跡の調査・報告が進むにつれて、埋設土器の事例の報告が増加してきており、その時期的変遷や分布・系譜・用途といった諸問題に一定程度、接近できる資料が蓄積されつつある。

本稿では、以上のような現状の理解にたって、まず、近畿地方出土の埋設土器を集成し、そのあり方の検討を通じて、埋設土器風習の実態を明らかにするという基礎資料の整備を課題とする。その上で、上記した諸問題について考察を及ぼし、現段階での理解を述べておきたいと思う。

なお、筆者は人がなんらかの意図をもって土中に埋設した土器を埋設土器と総称し、その用語自体に性格や時代を限定するような意味付けを与えていないが、本稿では中戸出土の埋設土器と直接的な関連を有すると思われる縄文中・後期の資料を検討の対象とした。晩期の埋設土器については機会を改めて検討することとしたい。

2. 検討の視点

数多くの先行研究では、様々な点が検討対象とされており、検討すべき視点はほぼ出尽くしているといえる。最初に、問題とすべき視点について簡単にふれておこう。検討すべき点は次のように大きく4

つにまとめることができるであろう。

（1）埋設土器そのものの検討

- a) 器種（有文、無文など／深鉢、壺など）
- b) 型式、系譜の問題（在地か異系統か）
- c) 埋設前の用途の検討（炭化物の付着など）
- d) 法量

（2）埋設法に関する検討

- a) 使用個体数、複数時の組合せ方（単独、合わせ口、合わせ蓋／合わせ目への別土器の被覆）
- b) 埋設状態（正位、斜位、逆位、横位）
- c) 欠損状態、人為的な打ち欠き・穿孔
- d) 掘り方の規模・形態
- e) 配石等の附属施設（上部の構築物＝標識、支え石など）

（3）空間的位置の検討

- a) 屋外／屋内（どの位置か）
- b) 他の遺構との関連性

（4）内容物の検討

3. 事例の検討

土器の分布圏等より、福井県、三重県から兵庫県の範囲までを近畿とし、対象範囲とした。また、時期別に変遷を把握するために、大きく、中期後葉以前、中期後葉、後期初頭、後期前葉、後期後葉の時期に大別した^③。集成の結果を表1に、遺跡の分布を図1に示す^④。管見では、26遺跡60例を集成することができた。中期後葉以前および後期後葉に属するものについては寡聞にして類例を捜すことができなかった。時期別に、そのあり方について、上記した視点ごとにみていくことにしよう。

＜中期後葉＞ 近畿における埋設土器の初見期である。三重県地蔵僧・東野B、福井県右近次郎・後野という近畿東部、北部および近畿中央部の奈良県宮滝で資料がみられるが例数は少ない。

（1）器種はすべて深鉢で有文が多い。

（2）すべて単独埋設である（晩期の埋設土器と異

なり、滋賀県今安楽寺の1例を除いて、中・後期例はすべて単独土器埋設である）。右近次郎では検出された2例とも底部を打ち欠いている。すべて正位に埋設している。

(3) 屋外、屋内ともにあり、全体数は少ないが屋内例が多い。右近次郎例の1基は、炉と向き合う位置で、壁ぎわに近い位置にあり、入口付近に位置すると想定することができる。

(4) 内容物のわかる例はない。

この時期は中部高地から西関東では屋内埋設土器が普遍的に存在する時期であり、隣接地域である岐阜県の牧野小山⁵、阿曾田⁶では屋内埋設土器をもつ住居が複数発見されている。福井県角野前坂⁷で発見されている屋内埋設土器も詳細は不明であるが、この時期に属するものであろう。今後、近畿中央部でも類例が増加することも予測されるが、現状の分布・例数から判断して、中期後葉の段階では、近畿では埋設土器はまだ安定した普及状態を示しているとは言えず、分布の中心も近畿東部・北部といった東日本の影響をより強く受け得た地域にあったと考える。

〈後期初頭〉 例数は急増し、12遺跡19例以上が

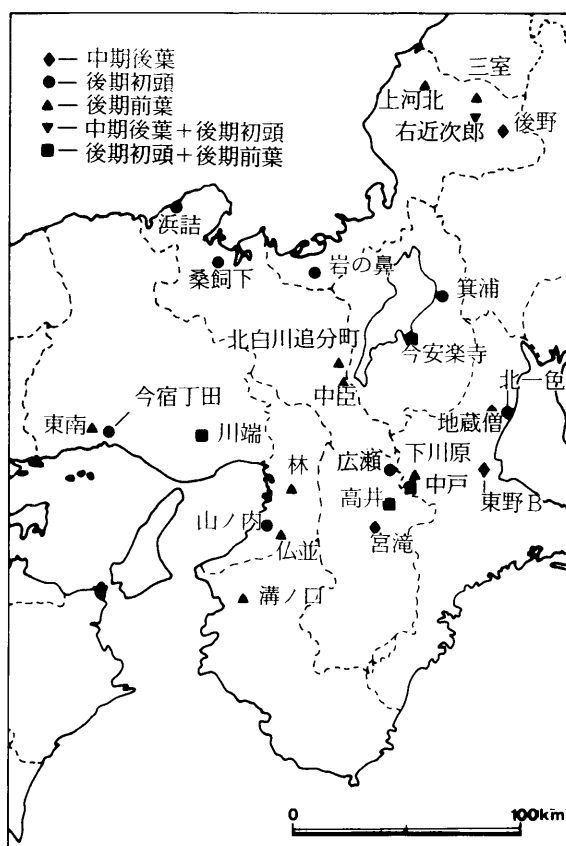


図1 近畿地方における埋設土器遺跡分布図

確認できる。京都府桑飼下・浜詰、大阪府山ノ内、兵庫県今宿丁田といった事例から、さらに西に進出し、ほぼ近畿全域に分布する状況をもてとれる。さらに西に位置する九州の福岡県長野宮ノ前でも、底部を打ち欠き、正位にすえられた埋設土器が検出されており、後期初頭に位置付けられている⁸。この段階で、急速に西に伝播していったと理解することができるであろう。

(1) 使用されている土器は深鉢が多いが有文、条線地、縄文地といった多様な器種が使用されている。口縁部から胴部が遺存している例で、無文になるものは確実な例をみとめることができない。

(2) 埋設形態は滋賀県今安楽寺の1例を除いて、単独埋設である。今安楽事例は人型の有文深鉢の内部に縄文地深鉢が入っていたもので、内部の土器は蓋として機能していたとも想定できる。ただし、他の土器で蓋をしていた例は中・後期の例では類例がなく、むしろ、内部出土の土器は埋納物と考えた方がよいのかもしれない。

埋設状態は正位が多いが、逆位、横位もある。底部に穿孔を施す例、底部を打ち欠く例が多い。右近次郎では、ひとつの住居跡より2基の埋設土器が検出されており、そのうちの1基は逆位に埋設されたのち、床面上に川原石3個を用いて配石が施されていた。

(3) 屋外、屋内ともに認められるが、屋外例が多い。福井県岩の鼻、奈良県高井では同時期の住居跡・土坑が、滋賀県箕浦や奈良県広瀬では同時期の土坑が近接する。岩の鼻例について、報告者は埋設土器を小児用甕棺と考え、近接する成人用土壙墓、住居跡との有機的関係を想定している。

(4) 滋賀県今安楽寺で1例中より動物の牙？が出土している。

〈後期前葉〉 10遺跡26例以上が確認でき、前段階よりさらに増加し、ほぼ近畿全域で資料がみとめられる。

(1) 器種はすべて深鉢で、有文、縄文地、無文がみとめられるが、無文のものが卓越する点で前段階との差異をみせる。

(2) 正位例が多いが、前段階では1例のみみられた横位例がやや増加の傾向を示し、一方、逆位の埋

時期	遺跡名	所在地	位置	埋設形態	出土数	器種・型式	埋設状態				欠損状況	他の遺構・備考
							正	斜	逆	横		
中期後葉	地蔵僧	三重県龜山市川崎町	屋外	単独	1	有深・醍醐式	1					住居跡、土壇
〃	東野B	三重県志摩郡野町	屋外	単独	1	有深・醍醐式	1					
〃	右近次郎	福井県大野市	屋内	単独	2	有深・大杉谷式	2				底部打ち欠き	時期不明がもう1基ある
〃	後野	福井県大野郡和泉村	屋内	単独	1	条深・大杉谷式				1		住居跡、土壇
〃	宮滝	奈良県吉野郡吉野町	屋外	単独	1	有深・北白川C式	1					
後期初頃	北色	三重県鈴鹿市	屋外	単独	1	有鉢・中津式			1		底部穿孔	
〃	中戸	三重県名張市	屋外	単独	1	有深・中津Ⅱ式	1					土壇
〃	岩の鼻	福井県遠敷郡名田庄村	屋外	単独	2	有深・深・	1				底部穿孔	土壇墓、住居跡
〃	右近次郎（前出）		屋内	単独	2	？・有深・中津Ⅰ式				1	底部打ち欠き	上部に配石 同一住居跡より出土
〃	箕浦	滋賀県坂田郡近江町	屋外	単独	4	有深・中津式 深・	2 1				1基に底部穿孔 底部穿孔	土壇
〃	今安楽寺	滋賀県神崎郡能登川町	屋外	合蓋？	1	有深・縄深・中津式	1				両者とも底部穿孔	大型の有深内部に、縄深が入っていた。
〃	〃	〃	屋外	単独	1	条深・中津式	1				底部穿孔	
〃	桑飼下	京都府舞鶴市	屋内？	単独	1	有深・	1					
〃	浜詰	京都府竹野郡網野町	屋内	単独	1	有深・中津Ⅱ式			1			
〃	高井	奈良県榛原郡榛原町	屋外	単独	2	有深・北白川C式4期 縄深～中津Ⅰ式	2				底部打ち欠き	住居跡、土壇
〃	広瀬	奈良県山辺郡山添村	屋外	単独	1	有深・中津式	1？				底部打ち欠き	
〃	山ノ内	大阪府岸和田市田治米	屋外	単独	1	縄深・中津式				1		
〃	今宿丁田	兵庫県姫路市		単独	1	有深・				1		
後期初頃～前葉	中戸（前出）		屋外	単独	2	深・	2				底部穿孔	土壇、前葉の住居跡
〃	今安楽寺（前出）		屋外	単独	6	条深・深・	2 4				1基に底部穿孔 底部穿孔3、打ち欠き1	
〃	川端	兵庫県三田市木野	屋外	単独	1	深・	1					
後期前葉	下川原	三重県名張市夏見	屋外	単独	2	無深・北白川上層式	2				底部穿孔	住居跡、土壇
〃	三宅	福井県勝山市蓮羽町	屋内？	単独	1	縄深・	1					内部に礫の埋納これ以外に時期不詳の屋内3基
〃	上河北	福井県福井市上河北	屋外	単独	1	無深・北白川上層式2期か				1	底部穿孔	
〃	北白川追分町	京都府京都市左京区	屋外	単独	7	縄深・北白川上層式 無深・1期				1 2	底部打ち欠き 底部穿孔1、打ち欠き5	配石遺構、上部に配石のあるものあり
〃	中臣	京都府京都市山科区	屋外	単独	2	無深・北白川上層式2・3期	1				1	底部穿孔1、打ち欠き1
〃	高井（前出）		屋外	単独	2	有深・広瀬土壇 無深・40段階	2					底部穿孔
〃	溝ノ口	和歌山県海南市	屋外	単独	1	無深・北白川上層式2期				1	底部一部打ち欠き （他の底部片をかぶせる）	配石・集石遺構
〃	〃	〃	屋内？	単独	1	無深・北白川上層式1～2期	1					底部穿孔
〃	仏並	大阪府和泉市	屋外	単独	2	無深・北白川上層式2期	2					1基に底部穿孔
〃	〃	〃	屋内	単独	2	無深・北白川上層式1期	2					底部穿孔1、打ち欠き1
〃	林	大阪府藤井寺市	屋外	単独	1	有深・北白川上層式1期	1					底部穿孔
〃	東南	兵庫県揖保郡太子町	屋外	単独	4	無深・北白川上層式併行	4					底部打ち欠き

表1 近畿における中・後期の埋設土器

器種の略称は次のとおり。有深＝有文深鉢、有鉢＝有文鉢、縄深＝縄文地深鉢、条深＝条線地深鉢、無深＝無文深鉢、深＝胴下半部のみ残存で、深鉢とのみ判定できるもの。

設はみられなくなる。

(3) 屋内例もみとめられるが屋外例が圧倒的である。同時期の住居や土坑が近接して存在する例として三重県下川原、和歌山県溝ノ口、大阪府仏並・林、兵庫県東南がある。溝ノ口や東南では配石遺構も見つかっている。複数検出した遺跡でも埋設土器が集中して分布するといった偏りはみとめられず、集落の一面に住居や土坑あるいは配石遺構と近接して、散在的に存在するあり方が一般的といえる。

これに対して、京都府北白川追分町では9基の配石遺構とともに、7基の埋設土器が狭い地区に密集して見つかっている(図2)。配石は調査区の南側に、埋設土器は北側にかたよる傾向にあるが、配石と埋設土器が一体となっているものも2例あり(Ⅳ号配石と5号埋設土器およびⅨ号配石と7号埋設土器)、両者の密接な関連が伺える。報告者は、配石は配石墓、埋設土器は甕棺と考えている。住居は存在せず、祭域・墓域的性格が強いと考えられる。周囲に住居域が存在する可能性も高いが、密集したあ

り方や埋設状態における横位例が多い点など、他の遺跡のあり方とはやや異質であるといえよう。

(4) 北白川追分町の1例から骨片、福井県三室で礫が出土している。

4. 小 結

以上、近畿出土の縄文中・後期の埋設土器について具体的なあり方についてみてきた。ここでは、以上の具体例に基づき、さらに周辺地域のあり方を参照しながら、近畿地方出土の埋設土器の系譜・時代の変遷・性格・用途といった問題を整理しておきたい。

＜埋設土器の系譜・時代の変遷＞

近畿地方の埋設土器は、その初見は中期後葉であり、それ以前から存在し、展開している東日本からの風習の伝播で捉えるべきものであろう。東日本の事例を検討した山本暉久氏によると埋設土器は、まず、屋外例については前期に遡るものが最も古く、後期前葉まで増加の方向をたどっている。一方、屋

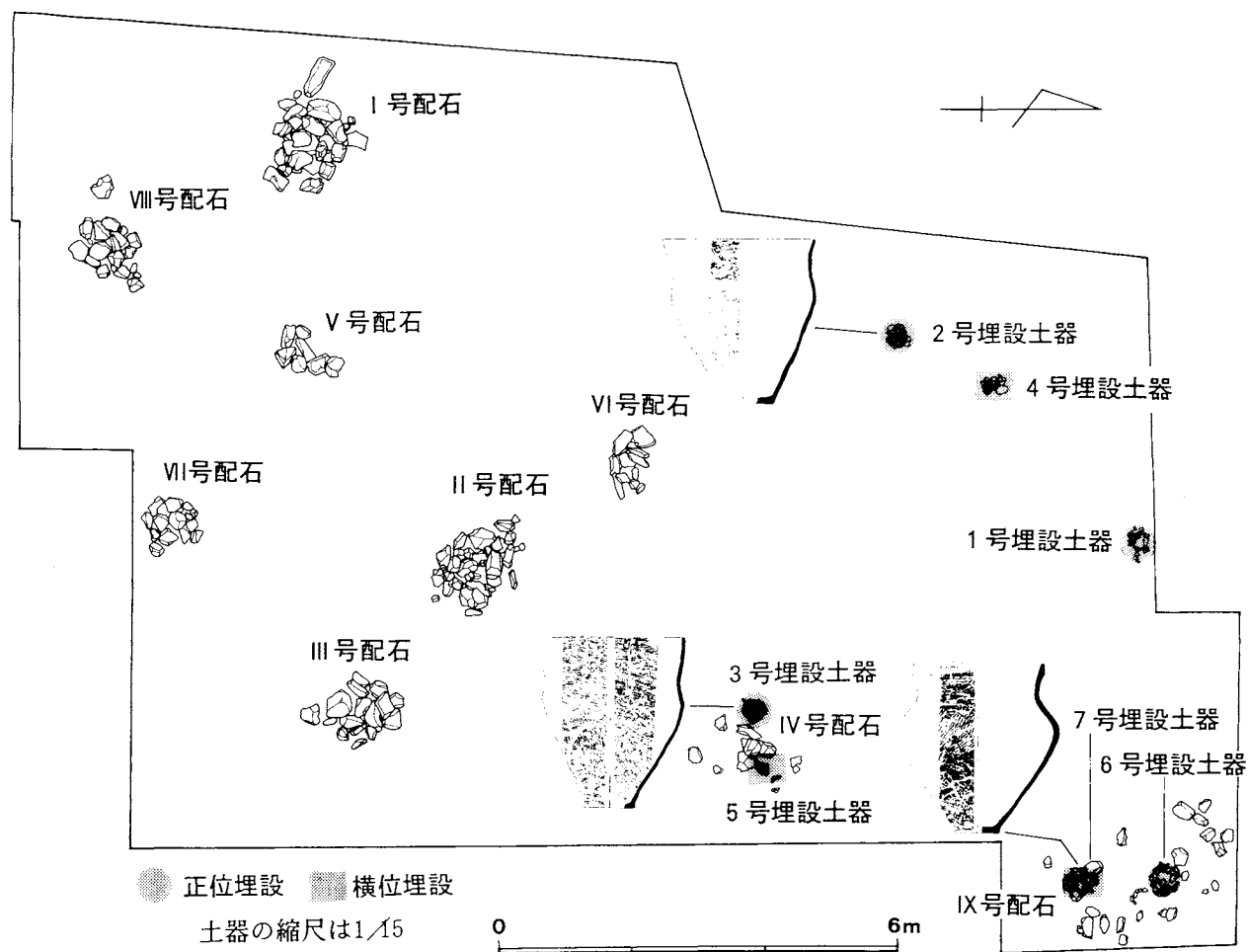


図2 京都府北白川追分町(京都大学植物園)遺跡における埋設土器の出土状況(中村74文献をもとに作図, 埋設土器の番号は泉77文献に拠る)

内例は中期中葉、勝坂式に始まり、中期後葉には普遍的なものとなり、中期末～後期初頭までこの傾向は継続するものの、後期前葉には急激に減少するという⁹⁾。

これに対して、近畿地方では中期後葉では屋内例が多く、後期初頭では屋外・屋内例ともにみられるが、屋外例が優勢となり、後期前葉に至って屋内例も見られるものの屋外例が圧倒的に多くなり、後期中葉には屋内・屋外例ともに消滅してしまうという変遷を示している。これは東日本のあり方とほぼ相似的な展開を示しているといえ、近畿における土器埋設の風習の成立、展開が東日本からの風習の伝播によって起ったと理解できる。

中期後葉以降、後期前葉にいたる時期は土器や石器などの生活用具あるいは耳飾りや配石などの祭祀的宗教的用具・施設が新たに東日本から流入してくる時期と考えられており¹⁰⁾、埋設土器風習もこの見解を支持するひとつの資料とすることができるであろう。

＜埋設土器の性格・用途＞

埋設土器の用途を考える上で、もっとも重要なのは内容物の検討である。内容物のわかる例は晩期以前では少なく、骨片が出土した北白川追分町、礫が出土した三室、動物の牙？が出土した今安楽寺がある程度で、手がかりは少ない。そこで、類例の多い東日本の事例を参照してみよう。この時期には、屋内の埋設土器と屋外の埋設土器の2者がある。屋内の埋設土器の用途については、幼児の埋葬棺、胎盤の収納施設あるいは供儀埋納の施設といった見解がある¹¹⁾が、根拠となるべき内容物が検出された事例はまだないようである。

一方、屋外の埋設土器については、人骨のみ見ついている例がかなりある¹²⁾。そのうち、後期のものについてみると後期初頭の青森県で集中的に見ついている成人再埋葬をのぞくと胎児、新生児、幼児といった未成人期の人骨が圧倒的に多く、屋外埋設土器の重要な用途として未成人甕棺があったことは間違いないと思われる。先に述べたように、近畿の埋設土器は東日本の風習の伝播によって成立、展開すると考えるので、この時期の屋外埋設土器の主要な用途として、未成人を対象とした埋葬用容器＝

甕棺を想定することができよう。

ただし、すべての埋設土器を甕棺とすることは、現状では早急であろう。すでに述べたように、他の遺構との関連において、埋設土器のあり方に多様性がみとめられることや瀬戸内地方の岡山県岡山大学大学院自然科学研究科棟新営予定地でみつかった後期中葉（彦崎Ⅱ2式）の埋設土器には、堅果類が貯蔵されていた¹³⁾ことから推定されるように、埋設土器が多様な役割・用途をもっていたことも否定できない。近畿・瀬戸内でみつかった貯蔵穴の立地条件や埋設土器の多くが意図的に底部を破壊されている点から、近畿の埋設土器の大半について、貯蔵用容器である可能性は乏しいと考えているが、用途・性格を一層明らかにしていくためには、内容物について脂肪酸分析等の化学的分析を積極的に進めていく必要がある。

なお、近畿の埋設土器風習は後期前葉でいったんすたれるようであり、再び、みられるようになるのは晩期前葉以降である。晩期例は土壌墓とともに群集して、明瞭な墓域を構成するものが多く、人骨出土例もあり、甕棺としての性格が明瞭である。後期の埋設土器と系統的な関連性を有するかどうかについては、今のところ年代的な隔たりが大きいため今後の研究課題としておきたいと思う。

以上、埋設土器を検討する上で、2・3問題となる点について考察を加えた。最初にも記したように、本稿は基礎資料の整備を主要な課題とし、問題点については若干の整理を行えたにすぎない。今後、他の地域や晩期の事例との比較検討などを行いながら、さらに検討を加えていきたいと考えている。

また、今回集成した資料の大部分は最近10年間ほどの調査の成果によるものである。現状の調査状況を考慮すれば、今後、関連資料が急増していくことも予測できよう。そしてまた、埋設土器としての認定やその性格の解明には、まず第1に、発掘現場での検討が不可欠であることは言うまでもないことである。本稿が、従来あまり関心をもたれることの少なかった西日本縄文時代の埋設土器について、目を向けていただくきっかけとなれば、本稿の目的の一端は達せられたものとなろう。

（謝辞） 資料の収集・観察にあたっては、植田文雄、門田了三、川崎保、田村陽一、中村健二、服部芳人、菱田哲郎、藤田憲司、穂積裕昌、三村修司、

<注>

- ① 総括的に論じているものとして、木下忠『埋甕——古代の出産習俗』、1981年、菊池実「甕棺葬」・桐原健「埋甕」 縄文文化の研究9、1983年を参照。
- ② 坂詰秀一「縄文文化における甕棺葬の基礎的研究」 立正大学文学部論叢9、1958年、渡辺誠「縄文時代甕棺の基礎的研究」1 考古学論叢、1974年。
- ③ 胴下半部～底部のみ遺存しているもので、後期初頭か後期前葉か、時期判別の困難な資料については、後期初頭～前葉とした。また、後期初頭とした時期には、一部、中期最末期と考えられるものも含めている。
- ④ 埋設土器としての認定や具体的なあり方については、報告書の記述を尊重したが、型式認定や埋設状態の判定で独自の判断を下した部分がある。また、底部穿孔等の観察にもとづき、筆者が埋設土器として認定したもの（三重県下川原例）もある。また、欠損状況については、埋設時の人為的な破壊と認定できるもののみ記述した。

図表出典

遺 跡 名 文 献

地 蔵 僧——亀山市教育委員会『地藏僧遺跡発掘調査報告』 亀山市埋蔵文化財調査報告Ⅰ、1978年。

東 野 B——1987年度、三重県教育委員会発掘資料。服部芳人氏、田村陽一氏の御教示による。

右近次郎——中司照世・工藤俊樹『右近次郎遺跡』Ⅰ 大野市文化財調査報告書 第2冊、1982年、木下哲夫・工藤俊樹「右近次郎遺跡」 福井県史 資料編13、1986年。

後 野——橋本幹雄ほか『後野遺跡』、1978年。

宮 滝——末永雅雄『宮瀧の遺跡』 奈良県史蹟名勝天然記念物調査会報告 第15冊、1944年。

北 一 色——鈴鹿市教育委員会『鈴鹿市史』第1巻、1980年。

岩 の 鼻——網谷克彦・畠中清隆編『岩の鼻遺跡』Ⅱ、1987年。

箕 浦——滋賀県埋蔵文化財センター「縄文後期の埋甕群を発見」 滋賀県埋文ニュース 第112号、1989年および調査担当者、中村健二氏の御教示による。

今安楽寺——植田文雄「琵琶湖東岸部における縄文後期集落の調査——今安楽寺遺跡——」 第7回近畿地方埋蔵文化財研究会資料、1989年、および調査担当者、植田文雄氏の御教示による。

桑 飼 下——渡辺誠編『桑飼下遺跡発掘調査報告書』、1975年。

浜 詰——岡田茂弘「京都府浜詰遺跡発見の堅穴住居跡」 先史学研究 第1号、1959年。

高 井——柳沢一宏『榛原町分布調査概報』 榛原町文化財調査概要2、1987年、および調査担当者、柳沢一宏氏の御教示による。

柳沢一宏、吉田昇の各氏に大変お世話になり、有益な御教示をいただいた。末尾ながら記して、深甚なる感謝の意を表します。

- ⑤ 増子康真ほか『牧野小山遺跡』 県道七末可児線道路工事埋蔵文化財調査報告書、1973年。
- ⑥ 中津川市教育委員会『阿曾田遺跡』、1985年。
- ⑦ 南洋一郎「角野前坂遺跡」 福井県史 資料編13、1986年。
- ⑧ 川崎保ほか『長野川流域の遺跡群』Ⅰ 前原町文化財調査報告書第31集、1989年。
- ⑨ 山本暉久「縄文時代中期末・後期初頭期の屋外埋甕について」 信濃29-11・12、1977年。
- ⑩ 泉拓良「京都大学植物園遺跡」 佛教藝術 115号、1977年、泉拓良「後期の土器——近畿地方の土器」 縄文文化の研究4、1981年。
- ⑪ 前掲注①桐原文献。
- ⑫ 前掲注①菊池文献。
- ⑬ 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「大学院自然科学研究科棟予定地」 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第2号、1989年。

広 瀬——松田真一「山添村広瀬遺跡発掘調査概報」 奈良県遺跡調査概報（第1分冊）1981年度、1983年。

山 ノ 内——（財）大阪府埋蔵文化財調査協会、藤田憲司氏の御教示による。

今宿丁田——兵庫県立歴史博物館編『発掘が語る兵庫の歴史——10年の成果——』、1986年。

川 端——吉田昇・岸本一宏『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書（2）』 兵庫県文化財調査報告書 第62冊、1988年および吉田昇氏の御教示による。

下 川 原——門田了三『下川原遺跡』、1986年。

三 室——仁科章『三室遺跡』 勝山市文化財調査報告 第4集、1982年、仁科章・工藤俊樹『三室遺跡』Ⅱ 勝山市文化財調査報告 第5集、1983年。

上 河 北——木下哲夫「上河北遺跡」 福井県史資料編13、1986年。

北白川追分町——中村徹也『京都大学理学部ノートバイオロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』、1974年および泉拓良「京都大学植物園遺跡」 佛教藝術 115号、1977年。

中 臣——（財）京都市埋蔵文化財研究所編『中臣遺跡発掘調査概報』昭和56年度、1982年。

溝 ノ ロ——中尾憲市・前田敬彦『溝ノロ遺跡』Ⅰ、1984年および同『溝ノロ遺跡』Ⅱ、1988年。

仏 並——松尾信裕ほか『仏並遺跡』、1986年。

林 ——大阪府教育委員会『林遺跡発掘調査概要・Ⅲ』、1981年。

東 南——調査担当者、三村修次氏の御教示による。